

これからの猪猟

〈新連載〉

田宮 治

サバイバル戦略

何だかんだと力説し、全力で挑戦し頑張ってきたところで、人間には必ず限界が来る。気持ちの上では「まだまだこれからだ」と思

っている。また、改正された動物愛護管理法は今年九月から施行されますが、さらに厳しくなり、どの道をたどるにしても簡単なものではなくなった。

たいとの思いとは裏腹に、起死回生の妙薬などあるはずもなく、日本社会の大きな流れの中で厳しさは増すばかりである。そんな危機的な状況を作り出しているのだ。

先にも繋がらない。そんな八方塞がりの時機にこそ、猟人は総力を結集して、全員が一丸となって大事な掛けがえのない猪猟の伝統を守り抜かなければならない。そうでなければ、人生を懸けてまでや

ってきた意義もない。

私は大好きな猪猟と、苦心して作り育てた「田宮系猪犬」を守り抜くために、英知を結集して猪猟人生のすべてをぶつけて、このサバイバル戦略を見事に完成させるために、この局面を必ず乗り越える決意を新たにしている。

戦後の著しい復興は、教育や食生活を中心に大変革を遂げた。その結果、人心は快樂主義に走り、日本の伝統文化はいつの間にか置き去りにされた。今や若者たちの物事に対する考え方は想定外になつてゐる。当然、苦勞ばかりで金儲けにもならない猪猟文化や、日本古来の道徳はすっぽり忘れ去られてゐる。それが原因で環境破壊が進み猪野は荒れ放題で、もはや打つ手もない状態である。

これは私が猪猟の王道と信じ、覚悟を決めて、この猪道完成のために必死に挑戦して猪猟技術を磨き、これに欠かせない一流猪犬群の完成に没頭してきたのである。

そして、さらに行く手に立ち塞がる大きな要因は、猪猟界を取り巻く規律の強化や、年齢からくる猪猟の維持管理にかかる費用までもが追い打ちをかけて、なかなか気楽に猪猟を楽しんでいけるような状況ではない。

私は以前からこのような状況が来ることを想定して、猪猟の大切さと楽しさを教えることで、一人でも多くの猪猟人を育て上げ、猪猟の伝統を未来まで繋げてもらいたいとの思いで頑張ってきたのである。その様子はかつての『猪猟界』誌や『全猪』誌に掲載し続けてきた記事のとおりである。

大好きな猪猟を守り繋げていき

突き進むこれからの猪道

大切な仲間である猪猟者人口は年々減り続け、既に二十万人を切

てきた記事のとおりである。

大好きな猪猟を守り繋げていき

突き進むこれからの猪道



(上) 素晴らしい環境の山彦犬舎。犬舎で一番大切なのは日当たりの良いことである



(左) 親犬のオッパイを飲んでいる頃から人間用のミルクを与え、言葉をかけて育てるのが一番良い慣らし方である。全身を撫でて「よしよし」と褒めてやる

私が押し進めようと頑張り続けた手法はサバイバル戦略の大事なポイントとなるものである。

これから押し出すサバイバル戦略を見事に乗り越え、堂々と生き残るために絶対に欠かすことのできない重要な「基本猪猟技術」がある。その大事な原動力となるのが、ぞつくり揃って一流芸に仕上げた完成した「田宮系猪犬群」なのである。

元来、私の猪猟は人生を懸けたサバイバル戦であった。今にして思えば、八方塞がりて泣き出しそうなどん底から、誰にも頼らずただ一人の力で試行錯誤を繰り返してここまで登って来たのである。全く奇跡のようなものだ。

この当時、「今の狩猟界は真面目ではない。このままではやがて大変な時代が来るだろう」と私は察知していたのである。その頃はポインターとセターを数頭飼育して鳥猟に専念していたが、私が出猟する山梨や群馬の猟場から鳥との出会いがすっかり少なくなっていた。反対に大物猟は全盛になり、地元の大グループが猟場を独

占していた。そのため、鳥猟犬を入れようものなら「猪犬を放している。食い殺されても知らないぞ！」と脅されたものである。

獲物の鳥が姿を消した一方で、大物はどの猟場でも増えていた。そんな状況だったので、私は鳥猟を諦め大物猟に転換したのである。ところが、大物猟を志した当初は悪戦苦闘の連続だった。大物猟は何もかもが初めてのことだったので、まずは使える大物猟犬から作り上げなければならなかった。壮大な計画である。

物事を立案する大事な要素は十分な体験が決め手となるが、残念ながら私の体験は熊猟以外なく、その熊猟も人力による巻き狩りだった。この地方（新潟マタギの里、旧中俣村）ではそれが主流だったので、猪猟や猪犬については全く未知の分野であった。

しかし、私には子供の頃から磨いた狩猟の体験（五目猟）があり、この地方の猟法や猟犬作りにおいては、それこそ絶対の自信を持っていた。昔流に言えば、まさに「三つ子の魂百まで」である。



名犬にする第一条件は早期の綱引き訓練である。これによって車から放しても一緒に車まで戻って来る犬捜しの楽しい猪猟ができる

私の生国は新潟県最北にある旧中俣村小俣で、長閑な山裾に広がる一〇〇軒くらいの集落であった。わが家は農業のかたわら馬車二台を持って、小俣の八ヶ山奥にある雷集落から最寄りの府屋駅まで一六^きの道程を運送する業を営んでいた。

広い家の畜舎や庭には、馬四頭、牛三頭と、ニワトリを二十羽くらい放し飼いでいた。さらに田んぼには、二十羽くらいのアヒルが放し飼いにされていた。当然、猟犬(常時三、四頭)も

犬舎はあるものの放し飼いだっただ。犬たちは家の縁の下にもぐり込み、寒い冬は囲炉の床下に穴を掘り、好んでそこにもぐり込んでいた。

春先になると、母犬が仔犬を引き連れて縁の下から恐る恐る出て来た。忙しい父や兄たちは仔犬にかまっていられないので、「二頭だけ残し、あとは川に流すように……」と言っていたが、何とも可哀想で「せめてあと一頭を私が必ず育てるから」と父に懇願したものの、父からは「駄目だ」と言わ

れ、それでも一頭を隠して大事に育てたものだった。

終戦当時の食糧難の時代ではあったが、何もかもが自給自足で、取り立ての野菜や、山川からの自然の恵みとしての狩猟の獲物や山菜、木の実、川魚などが四季を通じて豊富にあったので、幸い十二人兄妹とおばあさんの食料に困ることは全くなかった。

集落の子供たちはみんな山遊びや川遊びが大好きで、元気に楽しみなが家庭を助けていた。特に私の家では山羊や豚、羊まで常時数頭いたので、兄や姉は当然動物好きで、よく家畜の面倒をみていた。

なかでも、三男の幸治郎兄は馬が大好きで、この地方で農耕馬の改良と普及のために自ら牧夫に専念し、素晴らしい種馬を飼育していた。それこそバスや車のない時代に、颯爽と馬に乗り、蹄の音を響かせながら山道を走り回っていた。

父の話では、そんな馬好きと手練だったことが仇となり、馬も兄も軍に召集され、新兵にもかかわ

らず古参兵に交って馬術をもって戦地に駆り出され、若くして戦死してしまつた。この無念の気持ちに「親孝行で、狩猟の腕も一番良かった」と父は事あるごとに私たちに話していた。

こんな山村では大人になつても希望する職業などない。当然、両親や兄たちは目の前の食うための努力が第一であり、毎日欠かさず朝早くから暗くなるまで働き続けていた。子供たちも毎日それぞれ与えられた仕事をしなければならなかった。

小学三年生頃から小動物や大きな馬まで世話をするようになり、五、六年生の頃には馬に乗つてすぐ近くの川で体を洗つてやれるようになった。

何もかもが戦後の何もない時代を生き抜き、家族が繁栄するために父母や兄姉たちは必死で働いていた。秋の農作物の取り入れが終わる十一月一日の豊年祭りを境にがらりと生活様式が変わり、わが家では狩猟一家となつたのである。

私が狩猟に病み付きになつたの

は、犬たちと一緒に野山を駆けめぐりながら獲物を追い、それを銃で撃つことだった。

父の自慢は大勢の子供たちであり、その子供たちがこんな何も無い山里でも自分たちで生き残れる自立の道を見つけて出せるようにと、農林業や運送業を中心に創意工夫して、全力で生き抜く姿を示していたようだ。その中でやっばり大好きな狩猟は、その楽しさを子供たちと共有し、それを子育ての要にしていたようである。

どんなに望んだところで、将来に期待の持てる職業などあるわけもなく、やっとその中で狩猟という生きる道を見つけ、兄弟全員を狩猟家に仕上げたのである。それ

なのに戦争は惨いもので、さあこれから頼りになる若い兄たちは、たった一枚の赤紙(召集令状)によつて上から五人も戦地に連れて行かれた。その揚げ句に、二男の幸吉と三男の幸次郎が戦死したのである。

両親の悲しみや苦しみは大変なものだったに違いない。それでも両親にはゆつくりと悲しむ余裕もなく、残る幼児まで一人ひとりの個性を見極め、その子に合った教育方針で育てたようである。

この集落では中学の卒業と同時に、家のために働くのが当たり前の中で、父は誰の意見も聞かず、どの子にも高等教育に目を向けて進学させてくれた。幸い兄たちは

日頃の試練のお陰で、気力や体力は集落でも抜きん出ており、五男の栄作兄らは毎年行われている豊年祭りの相撲大会で八人抜き(大会優勝)をいつも達成していた。

また六男の満兄や妹の崑江らも小学校は首席を通していた。

父は負けるのが大嫌い、喧嘩に負けて帰ろうものなら家には入ってもらえず、「もう一度やつて来い!」と、どうしても駄目なら噛みつけ!」と、まったくもつてとりつく余地もない頑固者だった。その分、母は優しさの代名詞のような人柄で、駄々をこねて父に雪中に放り出された私を、そつと家に入れて食事をさせてくれた。私が大学生になつても相変わらずで、上京するたびに涙ぐみ、そつと小遣いを持たせてくれたものである。

父母はとにかく仲の良い名コンビで、何をするのもどこに行くのも一緒だった。そんな両親の後ろ姿を見て育つたどの兄妹も皆夫婦仲は良く、今流行りの離婚などは一組もない。当然、私たち夫婦にも危機は何度かあったが、そんな時に何よりの教訓となつたのが

両親の働く姿であり、その時々言い続けて、懸命に教え導いてくれた人生を生き抜く方法だったのである。

冬は雪深い陸の孤島となるこの集落で、人生の基本となるサバイバル戦、つまり私の大好きな狩猟を徹底的に仕込まれたのである。何も無い集落ではどの家も自給自足が大原則である。目の前にある大自然をうまく活用して自力で考案し、作り、育て、完成して使いなさなければ何事も先に進まないののである。

今でこそ、欲しいものはすぐ手に入るが、当時は食うために働くことが基本であり、将来の夢など描ける時代ではなかった。そんな中で、わが家が押し進めた自給自足の計画は素晴らしいもので、農林業を主にして馬や牛を飼ひ、農作業や堆肥作りをしていたのである。さらに馬車で運送業をやつており、冬は道が通れなくなると狩猟をやつて必要な生活費に充てていた。

おやつを欲しがると子供たちのために、家の周りには大人が両手で



マロ号、ヨシ号、シロ号の食事な噛み止め



犬さえ良ければどんな大物でも簡単に仕留められる。そんな猪犬に仕上げるには、当然毎日の訓練がものを言う

抱えても足りないほど大きな梨の木七本と柿の木四本があった。田

んぼの畔には枝豆、畑にはトウモロコシ、ウリ、スイカ、サツマイモなど、何でも作っていた。

牛乳や卵は言うに及ばず、羊やカイコを飼うことでセーターや織物で衣服まで作っていた。そういう具合に、必要な物はすべて自作して子供たちを上手に育てていた。こうしたことをしていかなければ生きていけない時代だったの

である。

当然、厳しければ厳しいほど家族一丸となつてこの難局を乗り越えてきた。この両親の凄さは驚くばかりで、何もない厳しい時代だというのに大家族の生活を安全に守りながら、子供たちにはその時の状況に応じて仕事を与えていた。

自分で実行させ、生きた体験を積み重ねることを基に、その時期にその子に合った最高の夢を追いつ

求める実力を身に付けさせていたのである。

父がどんなに子供たちの将来のことを考えたところで、今流の進学塾もなければスポーツジムもない。どうあがいても、直接子供たちの後押しなどできるものでもない。そんな中で、動物を飼い、大自然の恵みを肌で感じる狩猟をすることで、共に喜び、楽しみながら雪国のどんな難問でも一緒に乗り越える術を示し、子育ての規範としていたようである。

そんな教えは兄たちにも受け継がれ、順次兄たちの後ろ姿を追って私や末っ子に至るまで、ごく自然にやる気が育まれ達成されたのである。今にして思えば、両親の自給自足の生活設計は実に見事なものであり、的確的を射っていた。あの時代にあつては、これ以上考えられない究極の子育てで、壮大な人生計画であつたと思う。

私がこの年になつても元気で猟場を駆け回り、思いどおりの猪猟を実践できるのも、若者たちと一緒に堂々と登り切つて頂点に立てるのも、元を正せば陸の孤島であ

る生国の酷寒の中で鍛え上げられた「五目猟」が基本となつている。

その猟法の中で特に忘れられないのが、犬に追わせるウサギ猟であり、私の大物猟の原点となつている。

私が自信を持つて猪猟ができるのは、当然、田宮系猪犬群あつてのことであるが、この大事な猪犬群を作り上げることができたのも、やっぱり生国で数多くの動物を飼つて子供ながらに飼育法を毎日学んだことが何より勝る教訓になつている。

特に、猟犬とは物心がついた頃からいつも一緒に、山遊びや川遊び、そして学校にまで付いて来るありさまだった。だから犬たちは友達のように仲良しだったので、その習性や訓練法は知り尽くしていた。

今、何十頭の犬を飼つたところで、あの頃を思えば容易いことたやすで、子供の頃の延長線上に私の猪犬がいるだけの話である。改めて幼児教育の大切さを痛感しているところであり、まさに「三つ子の魂百まで」である。(つづく)